茫茫元化中　　茫茫たる元化の中
誰執如此權　　誰か此の如き権を執る。

（本文は朱金城箋校『白居易集箋校』（上海古籍出版社）に拠る）（訓は續國譯漢文大成『白楽天詩集』に概ね従う。）

（原文中の傍線は、道真の詩に引かれている詩句）（原文中の点線は、道真の詩内容に間接的な投影が窺える詩句）

この詩の大意は次のようなものである。

私（白居易）は孔戡の死を聞いてそぞろに涙を流した。孔戡はかって山東の節度府（地方長官の役所）で掌書記（文書係）であったとき、従史（小役人）の不正を潔しとせず、病気を理由に官職を中途で辞して、洛陽に帰ってきた。その道（生き方）の真っ直ぐなことは弓弦のようで、少しも曲がったところはない。その後、二つの要職の話があったが、惜しいかな、二つとも叶わないで閑職にいて一生を終えた。そのため平生の剛気も空しく地に帰してしまった。天が万民を愛するものだとするのならば、何故に孔戡の寿命を奪ったのであろうか。天命は、一体だれが握っているのだろうか。

（續國譯漢文大成『白楽天詩集』）